

の辺は、たとえば、アフラックの永江さんのところにも助けていただきながら、いろいろ知恵を絞る必要があるとは思いますがね。

それから、やはり22年度以降の啓発の在り方は、21年を見ながら、例えばこういう会でも、いろいろまた意見を出し、知恵を絞って、それを反映させていただければいいなと思います。

永江さん、その辺について何か一言お願いします。

■永江委員 今まで皆様から2つのお話があって、1つが学校教育のお話ですね。私は子どもがいないので、なかなか学校という社会に今、縁遠いんですけれども、こういったことが教科書に載っていること自体は、自分の感覚、経験からは新鮮でした。以前よりは進んでいるんだなということです。

ただ、一方で、先ほどデータの方にもありましたように、年間30万人以上が日本でがんで亡くなっている。また、60万人近くの方が新しくがんにかかっているという中で、がんにかかっているほとんどの方が成人なのですが、その方に必ず家族がいて、多くはお子さんがいらっしゃるわけですね。当社では、がんで親御さんを亡くされたお子さんの支援もやっているんですが、子どもうちにそういうことを経験している子どもがいっぱいいるわけなので、当然自分の親がなるかもしれない、また、友達の親がそうだとすることを身近に体験する子どもも増えているはずですので、やはり学校教育というのは重要だと思いますし、逆に子どもがそういうことを知ることによって、生活習慣の改善であり、検診の受診であり、また仮にがんにかかった後、がんとつき合って生きるという中でも、子どもとか家族の理解というのはすごく大事で、日本の課題だと思います。

あと、お金の話なんですけど、それぞれの予算ですね。自分でこれだけのお金を使うことがないので、検討はつかないんですけれども、兼坂さんがおっしゃったとおり、私どもも広告をやっています、明らかに啓発普及というものには全然違う感覚の金額がかかるということはわかります。ですから、やはり財政の面では本当に厳しいのですが、国家全体で考えますと、財政を圧迫するというものの中に、病気というものがありますので、長期的に広い視点で見ると、普及啓発によってそういったものが減っていくということであれば、むしろ必要な投資ですし、そのためにはやはり一定の予算は必要なので、是非御努力をいただければと思います。

我々も逆に企業として、啓発普及には力を入れているわけなんですけれども、そこでタイアップというか、いい形で協力をさせていただいて、またこういう形での国の後押しがあるというところで我々も支援をいただくと、ますます活動が強化できるのではないかと考えております。

■中川座長 ありがとうございます。ちょっと時間があれですが、初等教育におけるがん教育は、確かに非常に重要だと思っています。これは禁煙対策も非常に重要なんですが、30年、40年先に効いてきます。

一方、学校教育は、例えば中学生でやると、これはどうでしょう。場合によったら10年、15年というスパンで効いてくるはずなんです。

そういう意味で、私はそこも非常に大事だなと思っていまして、11月8日土曜日の午後1時15分から、東京都国立市の国立第一中学校というところで、かなりお金もかかるんですが、先ほどの『がんのひみつ』という啓発用の冊子を中学生600人にさしあげて、がんの授業をやってきます。

その学校は非常に進歩的で、事前に登録いただければ、是非ごらんいただきたいということでしたので、御関心のある方は、どうぞお越しいただければと思います。

がん対策情報センターについて

さて、それでは、ここから若尾さんと衛藤さんに、今回の懇談会のために資料を提出していただいておりますので、その御説明をお願いしたいと思います。

では、資料 11-2 です。若尾さん、5分程度で御説明をお願いします。

■若尾委員 それでは、お手元の資料 11-2 をごらんになってください。

先ほどの予算のところでも、がん対策情報センターにがんに関する普及啓発事業の事業費をいただいて、活動させていただいております。

私の自己紹介で少し触れましたが、がんセンター、中央病院、東病院あるいは研究所の横並びにがん対策情報センターというのが平成 18 年 10 月にできまして、こちらで左側にあります、がんの医療を推進する人材育成、あるいは情報提供、治験や臨床試験の体制整備などの対外支援活動をしています。

こうすると、非常にがん対策情報センターはすごい組織ができたという印象がありますが、がんセンター全体で 1,300 人ほどスタッフがいますけれども、がん対策情報センターは 35 人しかいません。更に情報提供の担当者は 6 人で、家内工業的に何とか国のがん情報をつくって、それを発信するというをやっています。

下に四角で囲ってありますが「科学的根拠に基づいたがんについての信頼性の高い最新の情報と、がんに関する役に立つ知識やがんに対する地域・組織的な対策についての情報を、わかりやすく提供する」ということを、がん対策情報センター情報提供グループのミッションとしています。

提供することによって、国民の方あるいは患者さんが、がんについての正しい知識を身につけていただいて、がんを恐れることなく、自分らしい生活をしていただきたいということを目指しております。

2 ページ目ですが、では具体的にやっているかといいますと「がん情報サービス」というホームページをつくっております。今のところ、一般向け、医療者向け、拠点病院向けと分けているんですけれども、大体 4,200 ページほど公開しております、今、月に 170 万ページビューほどのアクセスがあります。

具体的な中身につきましては、説明はいたしません、この資料の 7 ページ以降に、ホームページの中身について御紹介しています。

少し簡単に触れますと、この中で病気の情報、治療の情報、あるいは病院の情報に併せて、予防と検診のコーナーというものも設けているんですけれども、対象とする方は、病気の情報は病気になった方が見る。病院の情報なども病気になった方が見る。予防のページは、病気でない方に見ていただきたい。対象は健康の方の方が多いと思われるんですが、やはり予防のページ、

検診のページに対するアクセス数はそれほど多くないというのが現状です。

このホームページをつくって、情報提供をしていたんですが、がんセンターがん対策情報センターの活動に患者さんの意見を取り入れた活動をしております。運営評議会という患者さんの代表を含む委員会がありまして、そちらでこのホームページを御紹介しましたら、インターネットを使える方はいいですけども、高齢者は使えないわよと、俵萌子さんに御指摘いただきまして、私たちにも使える情報をつくってくださいということを言われまして、3ページにあります「がんに関する冊子」というものを作成させていただきました。今日、お手元にそのうちの1冊『相談支援センターにご相談ください』というものを付けさせていただいております。実際には、今、39種類の冊子をつくらせていただいて、がん診療連携拠点病院が全国に351か所あるんですけども、そちらの相談支援センターにお配りして、そちらから皆さんに配布していただいているという対応をさせていただいております。

ところが、それで一生懸命拠点病院、あるいは相談支援センターでがんの相談に応じますよと活動していても、先ほどのアンケート調査にありましたけれども、相談支援センターを知っている方はまだ20%しかいないんですね。もっと多くの方に知っていただいて、活用していただきたいと思っております。この相談支援センターは、無料で何でも困ったことに対応できるように、ソーシャルワーカーや看護師がトレーニングを受けて対応するように、そのトレーニングもがん対策情報センターで担当しているところです。

この冊子は39種類で、450万冊つくって、そのような形で病院を通して配布などをしております。

それから、今、御紹介しました『相談支援センターにご相談ください』は、点字版なども作成しまして、視力障害者の方にも活用していただくよう、盲学校などにも配布させていただいたり、あるいはその相談支援センター用としまして、大きくて今日はお配りできないんですけども、拠点病院の情報を集めた電話帳のような冊子もおつくりして、病院に配布したりしております。

4ページ目に「がん患者必携」という言葉がございます。これは初めてお聞きになる方もいらっしゃるかもしれないんですが、御紹介がありましたがん対策推進基本計画の中に、がんに関する情報を載せたパンフレットやがん患者さんが必要な情報をとりまとめた患者必携を作成し、医療機関に提供していくことが書かれておりまして、これは今、毎年60万人の患者さんががんにかかるということなんですけれども、新しくがんにかかった方60万人すべての方に、がんに関する横断的な情報をお示しする。そうすると、がんは今、こういう状況ですよ、どういふサポートが受けられますよということで、心と体のサポートをするということを目指して、今、作成を始めております。

冊子Aというのも、大体300ページぐらいの本で、それだけではございませんで、冊子B、私の手帳、私のカルテというような、患者さん御自身が書き込んでメモをしていくような手帳を付けて、それをお渡しする。そのことも考えています。

この作成に当たりましては、点線の下にありますけれども、がん対策情報センターで患者・市民パネルというものを今、つくっております。今年の4月に最初50名の定員で応募したら、全国から270名ほどの応募がありまして、結局60名の方に絞らせていただきました。また、来年の春に40

名を追加して、100名で、この患者・市民パネルの方々に、患者さんあるいは家族の方の視点に立った御意見をいただきながら、この患者必携あるいはホームページの作成をしまいたいと考えております。

5ページ目は、そういうインターネットや冊子体だけではございませんで、実際に患者さんとフェイス・トゥ・フェイスでお話をする会というのを我々の方で対応させていただいています。

1つは、市民向けがん情報講演会です。年3回なんですけれども、がんセンターあるいは拠点病院を結ぶ多地点TV会議システムというもので、今、18か所に中継できるようになってまして、そちらで毎回500人ぐらいの方に参加していただいております。

ここに付けさせていただいた絵は、ちょうど天野さんに講演いただいたときのものなんですけれども、「がん情報の探し方」という講演会をして、今日お配りしました、このような小さい名刺サイズのカードをつくって、これもいろんなところでお配りしたりしています。

今年の11月8日には、「公共空間でのたばこ撲滅大作戦！」ということで、子ども世代をたばこから守ろうという講演会を予定しております。

それから、がん情報サービス向上のための地域懇話会というものを、我々ががん対策情報センターのスタッフが各地域に出向かせていただきまして、地域の方々と意見交換をするということをして今まで15か所でやっています、今週も明日、愛媛県に行く予定となっています。

ただ、我々がそうやっても、少ないスタッフで広い効果はなかなか期待できないということで、メディアセミナーというメディアの方を対象としまして、信頼のおけるがん情報をより広く伝えるにはどうすればいいかという勉強会的なものを含めまして、メディアの方と一緒に考える会を年10回開催しています。

あと一つ、右にポスターが付いていますが、これは事業とは関係ないんですが、少ない予算の中で、先ほどタイアップという言葉がありましたけれども、昨年映画の会社とタイアップしまして、この拠点病院とか相談支援センターを御紹介するポスターを7万5,000部、我々は全く費用をかけずにつくっていただいて、それを送っていただいたという活動も少しずつやっています。これは、今まで病院向けの活動だったのが、こういうポスターをつくりますと、映画館とか駅とかに配布して、より多くの方に見ていただけるということで、このような活動も考えております。

最後のスライドになりますけれども、がんセンターのがん対策情報センターは、このような形で、厚生労働省とか、あるいは都道府県、全国の拠点病院などから情報をいただいて、あるいは学会と協力したり、NPOから情報をいただいたりして、がんに関する情報をつくっています。ホームページ、冊子あるいは講演会などを通して、患者さん、御家族あるいは一般国民の方に何とか伝えようと頑張っております。

ところが、現状を申しますと、患者さん御家族には利用していただいている状況なんですけれども、本当に健康な方に対するアプローチはしているんですけれども、健康な方を検診・受診したり、何かアクションを起こさせるまでにはいっていないということで、この懇談会での御意見を参考に、そちらの一般国民の方に、どのような情報をどのような形で提供していくかということ参考にさせていただきたいと思っています。

以上です。

■中川座長 ありがとうございます。御意見、アドバイス何かありますか。

山田さん、何か言いたそうですね。

■山田委員 何か困ると私に振れば良いと思ってね。

■中川座長 そうですよ。だって、ざっくばらんというのは、山田さんにかかなり依存しているところがあります。

■山田委員 そうですね。ごく一般的な意見を言えるのは私だけかなと思いますが、お金が随分かかりますね。これはびっくりしましたね。私たちが今、やっている小さいスター混声合唱団は、ただです。大変きついです。

やはり、1つ資料を何かつくったり、ポスターをつくったりしても、すごくお金がかかりますね。ですから、手書きです。手渡しで渡せる範囲で渡すとか、そういうようなことですね。でも、そんな範囲では、国レベルのことは難しいなとは思いますがね。

私はタレントですから、簡単に考えると、例えば明石家さんまとか、大人気の木村拓哉はヘビースモーカーなわけですね。彼らを説得しに行くと、がんになるからね、子どもたちに影響のあるあなたたちがたばこをやめるとかいうことをドキュメンタリーで撮れたとすれば、随分な啓発活動ですね。

■中川座長 そういうアイデアが欲しいんですよ。本当にありがとうございます。

■山田委員 猫の首にだれが鈴を付けに行くのかという感じがあるかもしれませんが、こういうことを私は考えておりました。

■中川座長 でも、そうなんです。これだけ正しい内容で、予算も取れていて、しかし、それが一般の方の目に止まっていないというのは残念です。やはりやり方を考えなければいけなくて、そのために、この会でもアイデアを出していただきたい。

若尾さん、この冊子は、がん患者必携ということは、がんになった方全員がこれをもらうことになるんですか。

■若尾委員 基本計画がありますので、そのようなことを考えているんですが、ただ、ここにも今、お話がありました予算がありまして、60万冊を毎年刷って、それを届ける予算が今の普及啓発事業の中でできるかという、結構ぎりぎり。今のことを全部やめて、これだけで何とかできるかできないかという状況になると、それも情報が日々更新されてきますので、どんどんアップデートをしていくような経費も必要となりますので、これは本当にすごく大変な大きな事業になってしまっているね。

■山田委員 でも、がんになってみたら、初めて病院の方からお薬手帳というものをもらったんです。一般的には余りみんな知らないみたいで、これをもらっただけでもちよっとうれしかったんです。それにメモをすることが始まって、先生の言うこともメモするようになったし、お薬のこともきちんと間違えずに、パニックにならないように貼るようにもなりましたから、こういうのはいいなと思いますよ。

■中川座長 差し込みのところもいいし、地域情報のところも、アイデアはすごく面白いですね。